

フォークランド戦争の軍事的インプリケーション

—同じ島嶼国の立場から—

柳澤 潤

はじめに

1982年のフォークランド戦争（Falklands War）は、西側同士の国が陸上・海上・海中・空中4つの領域で最新兵器から旧式兵器までを駆使して戦った戦争だった。また初めて西側の海軍艦艇が、多数のジェット機による航空攻撃に長期間さらされた戦争でもあった。そもそもこの戦争は、フォークランド諸島の領有権を原因とするものであり、アルゼンチンが奇襲で上陸作戦を行い奪回、イギリスはそれに対し航空攻撃、艦砲射撃等を行ってから上陸作戦を取行、再奪回し決着がついた。

日本の周辺諸国には、経済の発展並びに人口の増加によって、軍事力が増強されると同時に各種天然資源獲得への関心が高まり、一方的な領有権の主張を行う事例が散見される。本稿は、このような環境下にある日本にとって、フォークランド戦争に関するさまざまな研究から、何らかの軍事的インプリケーションを見出すことを目的としている。なお後方（ロジスティクス）については、すでにバズィー教授（Dr. Stephen Badsey）が詳細に論じているので、対象に含めない。本稿では、まず本戦争の参考となる特徴を抽出し、次いでそれらの特徴から日本へのインプリケーションを導く。

1 この戦争の特徴

(1) 戦略的背景

戦争準備

この節では戦争の特徴について、まず戦略的背景について述べる。戦略的背景として述べるものは、戦争準備と強力な同盟国の確保である。筆者がこの2点に着目したのは、フォークランド戦争は、アルゼンチンがフォークランド諸島の首都スタンレー（Stanley）を1982年4月2日に占領してから、イギリスが6月14日に再奪還するまでの74日間の短い戦争であったからである。この短い期間では、軍備や国際関係を急激に改変することは困難であり、戦争開始時までの戦争準備と同盟国との関係が大きな影響を及ぼすのではないだろう

うか。

イギリスとアルゼンチンの間で、長い間交渉をしながらフォークランド諸島の領有権に関する主張が真っ向から対立し、ついに戦闘へ発展した。このような場合、両国ともこの戦争のために相当の準備をしていただろうと思われる。しかしイギリス、アルゼンチン両軍ともこの戦争が起きること、あるいはこのような経過をたどることを考えていなかったため、実際は両国とも準備がほとんどなされていなかった。ここでは両国の戦争準備（あるいは準備のなさ）の状況とそれが戦争に及ぼした影響について述べる。

これをイギリスから見ると、多くのイギリス人はこの戦争が起こるまでフォークランドがどこにあるのかさえ知らなかった。フォークランドの問題自体がイギリスで重視されていなかったため、そこで戦うための兵器・編制・訓練の準備が全くできていなかった¹。また第2次世界大戦後イギリスは、長期にわたる経済危機で海軍軍備が縮小されてきた。1971年からスエズより東（East of Suez）にあるイギリス連邦諸国や植民地への軍事的防衛力を維持する政策は放棄された²。さらに1981年に国防方針を見直し、イギリス軍の主な任務は、NATOがヨーロッパで行う作戦へいかに貢献するかになり、南大西洋で戦うのに有用な兵器は次々削減されていった³。

他方アルゼンチン軍は、この戦争を仕掛けた側だから、本来なら準備を万端に整えていたはずである。確かにフォークランド諸島を占領することには熱心で、1982年4月2日の1日でフォークランド諸島を占領したが、それを守ることは全く考えていなかった。アルゼンチンは、イギリスが斜陽の帝国で、どんどん軍備を縮小しており、フォークランドを占領すれば、イギリスは反撃してこないだろうと考えていたのだった⁴。このように両軍とも予測していなかった戦争であったため、双方ともにこの戦争あるいはこの戦域に適合した兵器を投入することができず、ひいては作戦の推移に大きな影響を与えた。以下は、そのようすを論述する。

¹ “Editor’s Preface” Stephen Badsey, Rob Havers, and Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future*, (London and New York: Frank Cass, 2005), p. xiv; Nick van der Bijl and David Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, (South Yorkshire: Leo Cooper, 2003), p. 5; この戦争前にイギリス外務省のフォークランド諸島に関する優先順位は第242番目であった。(Eugene L. Rasor, *The Falklands/Malvinas Campaign: A Bibliography* (New York: Greenwood Press, 1992), p. 6.)

² John E. Woods, “The Royal Navy since World War II,” *United States Naval Institute Proceedings* (vol. 108, no. 3, March 1982), pp. 86-88.

³ Ministry of Defence, *The United Kingdom Defence Programme: The Way Forward, Cmnd 8288* (London: HMSO, 1981), para. 7, 27-31, pp. 5, 10; Alastair Finlan, *The Royal Navy in the Falklands Conflict and the Gulf War: Culture and Strategy* (London: Frank Cass, 2004), note 75, p. 31,

⁴ Martin Middlebrook, *The Fight for the ‘Malvinas’: The Argentine Forces in the Falklands War* (London: Penguin Books, 1990, first published by Viking, 1989), pp. 1-4; Robert L. Scheina, *Latin America: A Naval History 1810-1987* (Annapolis: Naval Institute Press, 1987), pp. 234-235.

アルゼンチン海軍総司令官アナヤ大将は、軍事政権の中でもマルビナス奪還論者の最強硬派だった⁵。その海軍は、ラテン・アメリカ諸国の海軍の中では優れた海軍とみなされていた⁶。しかし、世界一流のイギリス海軍と比べると、装備の面でも訓練の面でもひけを取っていた。

まず第1にアルゼンチン海軍は、対潜水艦戦に対する準備が何もできていなかった。4月イギリスによるフォークランド諸島周辺 200 海里の海上封鎖水域設定の宣言とともに、ごく少数の封鎖突破船を除き、アルゼンチン本土とフォークランド諸島との海上交通は断たれてしまった⁷。また5月2日にアルゼンチン海軍の巡洋艦「ベルグラノー」(ARA (Armada de la República Argentina) *General Belgrano*) が、イギリス原子力潜水艦「コンカラー」(HMS (Her Majesty's Ship) *Conqueror*) に撃沈されると、以後アルゼンチン海軍艦船はアルゼンチン領海外から出ることはなかった⁸。対潜水艦戦は海軍の重要な任務であり、これをほとんど行うことなしに領海内に蟄居してしまうことは、フォークランド奪回の強硬な主張者であることも考えると、準備不足や過失にとどまらない国家に対する犯罪に近いものと言って良いのでないか。

第2に、各種兵器の能力を最大限発揮するように準備ができていなかった。アルゼンチン海軍唯一の航空母艦「ベンチシンコ・デ・マジヨ」(ARA *Venticinco de Mayo*) は、1945年イギリスでの完成時には、最大速度 24.25 ノット (約 45 km/h) を出すことができた⁹。しかしこの戦争時には 15 ノット程度しか出すことができなかった¹⁰。またアルゼンチン海軍は 1974 年に当時の西ドイツから 2 隻の近代的な 209 型 (Type 209) デーゼル潜水艦を導入した¹¹。そのうち 1 隻の「サルタ」(ARA *Salta*) は、この戦争開始時に海軍工廠における修理から復帰したばかりだったが、海中騒音が大きく実戦には使えず、この戦争終了までこの故障を修理できなかった。もう 1 隻の「サン・ルイス」(ARA *San Luis*) は、船体の機能としては異常がなく、フォークランド諸島周辺に哨戒出撃した。しかし魚雷管制装置に不具合があり、この哨戒間にイギリス艦船に対し魚雷を発射したが命中しな

⁵ Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas,'* p. 1.

⁶ Robert L. Scheina, "Regional Review: Latin American Navies," *United States Naval Institute Proceedings* (vol. 107, no. 3, Mar 1981), p. 24; Norman Friedman, "The Falklands War: Lessons Learned and Mislearned," *Orbis* (vol. 26, Winter 1983), p. 908.

⁷ Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas,'* p. 68.

⁸ David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War* (London: Guild Publishing, 1987), p. 139.

⁹ *Jane's Fighting Ships 1982-1983* (London: Jane's, 1982), p. 9.

¹⁰ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II* (London: Routledge, 2005), p. 266.

¹¹ *Jane's Fighting Ships 1982-1983* (London: Jane's, 1982), p. 8.

かった¹²。

アルゼンチン海軍航空隊もこの戦争への準備ができていなかった。海軍航空隊はこの戦争でシースキミングミサイルのエグゾセ (Exocet) 空対艦ミサイルを世界で初めて実戦で使い、艦船を撃破して世界から注目を集めた。しかしこの戦争時、アルゼンチン海軍が保有していたエグゾセ空対艦ミサイル (AM-39 Exocet) は 5 発、その搭載母機であるシュペル・エタンダール (Super Étendard) も 5 機にすぎなかった (しかも 1 機は部品取りに使われ、実戦に参加したのは 4 機)¹³。もともと海軍航空隊はシュペル・エタンダールを 14 機、エグゾセ空対艦ミサイルを 20 発フランスから購入する予定だった¹⁴。しかしイギリスが最終的に輸送船も含め 100 隻を超える任務部隊を派遣したのだから、エグゾセを数百発保有し、シュペル・エタンダールを数十機持っていれば (それに空中給油機が多数あれば)、あるいはこれを阻止できたのかもしれない。アルゼンチン海軍自身がこの兵器システムの革新性を理解していなかったし、イギリスの反攻を考えていなかった証拠だろう。

アルゼンチン空軍も備えのない点が多数あった。まず第 1 に挙げられるのが、占領直後にフォークランド諸島に唯一ある舗装滑走路のスタンレー空港を延長しなかったことである。この滑走路は 4,100 フィート (約 1,250 メートル) の長さしかなく、主力となるジェット戦闘機/攻撃機には緊急着陸にしか使えないものだった。これをイギリス海軍が海上封鎖を行う前に、資材、工作機械および建設作業員を輸送し、3,000 メートル級の滑走路および航空機用掩体を建設するべきだった¹⁵。ここに航空基地が展開したなら、イギリスの任務部隊も容易にはフォークランド諸島へ接近できなかっただろう。しかしアルゼンチン空軍にはそのような考えがなかった¹⁶。

アルゼンチン空軍の欠けていたものの第 2 としては、主力戦闘機のミラージュ III (Mirage III) と搭載空対空ミサイルのマトラ R530 (MATRA R530)、マトラ R550 (MATRA R550) およびシャフリル 2 (Shafir 2) が旧式だった点である。対するイギリスのシーハリアー (Sea Harrier) FRS.1 もハリアーを原型と考えれば、さほど新しい機体ではない。しかしエンジン推力/機体重量比でみると 0.9 以上あり、ミラージュ III の約 0.5 ~ 0.7 (ミリ

¹² Scheina, *Latin America*, pp. 262-263.

¹³ Rodney A. Burden, Michel I. Draper, Douglas A. Rough, Colin R. Smith, David L. Wilton, *Falklands: the Air War* (Dorset: Arms and Armour Press, 1986), p. 34.

¹⁴ Scheina, *Latin America*, p. 256.

¹⁵ René De La Pedraja, "The Argentine Air Force versus Britain in the Falkland Islands, 1982," Robin Higham and Stephen J. Harris, eds., *Why Air Forces Fail: The Anatomy of Defeat* (Lexington: The University Press of Kentucky, 2006), pp. 242-243.

¹⁶ *ibid.*, p. 243. ローレンス・フリードマンは、アルゼンチン空軍が着陸用マットをフォークランド諸島へ向かう輸送船に一旦積み込んだが、輸送優先順位の変更で船から降ろされた、としている (Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign* Volume II, p. 734.)。

タリー～アフターバーナー推力) に比べると優れていた。また空対空ミサイルも AIM-9L でアルゼンチンのものより一世代新しいものだった¹⁷。

第3に空軍にとって、対艦攻撃は予想外のものだった。1969年アルゼンチンは陸海空軍3軍の任務分担を決め、国家に対する海上からの攻撃への対処は、全面的に海軍の担任事項となった¹⁸。そのためアルゼンチン空軍は、この戦争となって急きょ非誘導の爆弾で対艦攻撃について訓練したのだった。だからアルゼンチン空軍は超低空飛行でイギリス艦艇に爆弾を命中させても、信管設定の誤りで不発となるものが多かった。アルゼンチン空軍が行った対艦攻撃の中でイギリス艦船に命中した爆弾は約25発で、そのうち不発だったものは18～20発であった¹⁹。

アルゼンチン陸軍の準備不足は、4月に開戦を認めたことだった。アルゼンチン軍の中で問題点の一つは、その徴兵制度にあった。アルゼンチンの男性は、19歳の誕生日を迎える年に、1年間(実質10ヵ月)軍務に服する義務があった。そののちは、予備役となり国家の非常事態に再招集を受ける義務があった。アルゼンチンの部隊の1年は、1月に始まり将校や下士官は、その年の徴兵者を受け入れる準備を行う。アルゼンチン軍には、兵の階級を持つ志願兵の制度は存在しなかった。歩兵連隊では通常2月には、その年の招集者がそろい訓練を行うが、その年の終わりが近づくと招集者の解役が始まる。招集者の地位は低く、昇進は全くない。フォークランド戦争のとき、アルゼンチン陸軍の兵は、1963年生まれの間でほとんどが占められていた。陸軍では総員約130,000人中約90,000人が、海軍では総員約36,000人中約18,000人が、空軍では総員約19,500人中約10,000人が徴兵者であった²⁰。

この徴兵制の欠点は、中心にプロフェッショナルな将校と下士官がいるにもかかわらず、部隊が永久の初年兵訓練組織になることであった。編成部隊としての訓練はめったに行われず、ましてや諸職種連合作戦の訓練は行われていなかった。そして毎年初めの数ヵ月間、部隊は特に作戦能力が低く、まさにこの戦争は部隊能力が最低の時期に行われたのだった。一部のアルゼンチンの部隊では、フォークランドへの配備を知ってから、1982年に入った

¹⁷ Anthony H. Cordesman and Abraham R. Wagner, Ch. 3, "The Falklands War," *The Lessons of Modern War*, vol. III (Boulder: Westview Press, 1991), pp. 306, 309, 310; エンジン推力/機体重量比は、機体データから筆者が概算したものである(木村秀政監修『航空ジャーナル別冊—世界の軍用機1982』(1981年12月)21, 43頁)。

¹⁸ Pedraja, "The Argentine Air Force versus Britain in the Falkland Islands, 1982," p. 234.

¹⁹ Chris Hobson with Andrew Noble, *Falklands Air War* (Hinckley: Midland, 2002), pp. 66, 79-82, 88, 92, 95-97, 107, 124-128; Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, pp. 159-160, 191-194, 207, 212-214, 218-223, 250, 297-304; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, pp. 787-788.

²⁰ Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas,'* pp. 49-52; *Military Balance 1981-1982* (autumn 1981), pp. 92-93.

招集者を昨年訓練の済んでいる予備の者と入れ換えることが行われた²¹。

次にイギリスの準備不足の点を論述する。イギリス海軍では、前述 1981 年の防衛政策の見直しで NATO 戦略の中の一海軍という位置となり、最も重視された任務は、北東大西洋における対ソ連潜水艦作戦となった²²。その結果上陸作戦機能は軽視され、フォークランド戦争開始時に保有していた強襲揚陸艦は「フィアレス」(HMS *Fearless*) のみだった。姉妹艦の「イントレピッド」(HMS *Intrepid*) は、退役直後でまさに解体作業が始まろうとしているところだった。それを急ぎ修復して、以前搭乗していた乗組員を集め、フォークランドへ向けイギリスを出港したのは 4 月 26 日だった²³。

また前述のように経済事情悪化から 1971 年「スエズの東」への防衛力展開をあきらめ、「東大西洋」(Eastern Atlantic) でソ連海軍と対抗することとなった。このため通常離着艦航空機 (CTOL 機: Conventional Take Off and Landing) を運用できる航空母艦は 1979 年を最後に退役させた²⁴。この戦争に参加したイギリス空母は、V/STOL (Vertical/Short Take Off and Landing: 垂直/短距離離着陸) 機とヘリコプターが運用できるだけの ASW (Anti-Submarine Warfare: 対潜水艦戦) 航空母艦 2 隻で、早期警戒機の運用能力はなかった。これは「東大西洋」で運用するのだから、航空支援は陸上基地から受けることができる、という見とおしからでもあった²⁵。

しかし実際イギリス空軍機で陸上基地からフォークランド諸島周辺で行動できたのは、ヴァルカン (Vulcan) 爆撃機、ニムロッド (Nimrod) 哨戒機、ヴィクター (Victor) 空中給油機、ハーキュリーズ (Hercules) 輸送機程度で、これらも空中給油を受けながらであり、常時フォークランド諸島上空に在空できたわけではなかった²⁶。これが艦隊の防空上ひいてはフォークランド諸島周辺の航空優勢確保のためにも大きな問題となった。

またイギリスの艦隊は、小型攻撃機による集中爆撃に対する防空を想定して作られていなかった。イギリス海軍が想定していたのは、ソ連の長距離爆撃機から発射された巡航ミサイル、原子力潜水艦および核兵器に対処することであった²⁷。

²¹ Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas,'* p. 52; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign* Volume II, p. 82.

²² Ministry of Defence, Cmnd 8288, paras. 21, 22, p. 8.

²³ *ibid.*, para. 31, p. 10; Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, pp. 65, 68; Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 433.

²⁴ Woods, "The Royal Navy since World War II," pp. 86-87.

²⁵ Ministry of Defence, Cmnd 8288, para. 25, p. 9.

²⁶ 1982 年 5 月 1 日に行われたアセンション島からフォークランド東島のスタンレー空港の滑走路破壊を目的としたヴァルカンによる爆撃は、爆撃機 1 機を往復させるのに 11 機のヴィクター空中給油機を必要とした (Jeffrey Ethell and Alfred Price, *Air War South Atlantic* (London: Sidgwick & Jackson, 1983), p. 45.)。

²⁷ Finlan, *The Royal Navy in the Falklands Conflict and the Gulf War*, pp. 70-71.

さて両軍とも準備不足のまま戦争に入ったが、結果は優劣が付き勝負は決まってしまった。そこにはどのような差があるのだろうか。一つはイギリス人が直面する問題に自己を革新し即興で対処する能力を持っていること、並びにそれを統合作戦ベースで行ったこと、またイギリスの優秀な訓練・準備・リーダーシップあるいは能力、大胆さそして特に決意の堅確さに違いを見出す意見がある²⁸。

強力な同盟国の確保

戦略的な背景の2番目として、強力な同盟国の確保について述べる。すでに外交関係は小谷主任研究官が詳述しているので、軍事的な影響についてのみ述べる。アメリカ合衆国はカーター政権時代に、アルゼンチン軍事政権が人権抑圧を行っているとして1978年アルゼンチンに対し武器禁輸を発動した。レーガン政権になってから、アルゼンチン軍事政権は、中央アメリカにおける合衆国の反共政策を積極的に支援した。これは軍事政権が反共思想を持っていたことはもちろんだが、合衆国の武器禁輸を解除させようとする目的も含まれていた²⁹。

しかしこの武器禁輸はフォークランド戦争開始の時点でも継続していた。アルゼンチンは多数の兵器を合衆国から購入していたので、この武器禁輸は兵器並びにその搭載電子機器等の可動率低下に大きな影響を与えた。例を挙げれば、潜水艦「サンタ・フェ」(ARA *Santa Fe*: 元合衆国海軍「キャットフィッシュ」(USS (United States Ship) *Catfish*))は古くなった蓄電池を交換することができず、潜航時間が短時間に限られた³⁰。またアルゼンチン空軍および海軍航空隊の攻撃機 A-4 スカイホーク (Skyhawk) は、武器禁輸に伴う整備上の問題から可動率が悪かった³¹。

またアルゼンチンは、マルビナス (Malvinas: フォークランドのアルゼンチン呼称) 領有問題について、合衆国が引き続き以前と同様な中立的態度をとるだろうと予測していた³²。しかし結果は合衆国の全面的イギリス支援であった。イギリスは合衆国から兵器と後方支援並びに情報関係に関し絶大な支援を受けた³³。例を挙げれば、この戦争で大活躍した

²⁸ Cordesman and Wagner, "The Falklands War," p. 351; Pedraja, "The Argentine Air Force versus Britain in the Falkland Islands, 1982," p. 227.

²⁹ Lawrence Freedman and Virginia Gamba-Stonehouse, *Signals of War: The Falklands Conflict of 1982* (London and Boston: Faber and Faber, 1991, first published 1990), pp. 32-33.

³⁰ Scheina, *Latin America*, p. 262.

³¹ Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 264.

³² Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, p. 33.

³³ Cordesman and Wagner, "The Falklands War," p. 260; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 73.

AIM-9L 空対空ミサイル、ハーブーン (Harpoon) 対艦ミサイル、シュライク (Shrike) 対レーダーミサイル、スティンガー (Stinger) 地対空ミサイル、航空燃料約 4,700 万リットル、飛行場マット 4,700 トン、大量の迫撃砲弾などであった³⁴。合衆国のこれらの支援は、イギリスの勝利を容易にした。

強力な国家ではないが、近隣の国家との関係もこの戦争に影響した。アルゼンチンは長大な国境を接する隣国チリと、ビーグル水道 (Beagle Channel) ならびにそこに所在する島の領有をめぐる長年論争を続け、ときには実力が行使されることもあった。両国の関係は不良であった。

アルゼンチン軍は、イギリスが反撃することはないと考えていたが、イギリスの反攻が明らかになると、奪回を阻止するためフォークランド諸島へ陸軍部隊を増強した。それに選ばれた部隊に第 10 機械化旅団 (Brigada Mecanizada X) と第 3 歩兵旅団 (Brigada de Infanteria III) であった。これらの旅団が選ばれた理由は、第 10 旅団は国境に接していない首都周辺に駐屯していたからであり、第 3 旅団は関係が安定しているウルグアイとの国境に駐屯していたからであった。第 3 旅団は「北方」の亜熱帯地域に駐屯しており、第 10 旅団も寒冷地作戦に備えた部隊ではなく、これから冬に向かう南緯 50 度付近のフォークランドへ送ることは、ふさわしいことではなかった³⁵。

他の部隊を見ると第 6 山岳旅団 (Brigada de Montaña VI) と第 8 山岳旅団 (Brigada de Montaña VIII) は装備が優良であり、また第 11 機械化旅団 (Brigada Mecanizada XI) は、寒冷な気候の作戦にもっとも適している「最南方」の部隊であった。これらの部隊は手つかずのまま残っていたが、いずれもチリ国境に駐屯することから、フォークランド戦争へ動員することができなかった³⁶。

結局、アルゼンチンは、斜陽とはいえ大国イギリスと戦争するにあたって、イギリス自身ならびに超大国で大きな影響を及ぼす合衆国の反応の予測を全く誤った。これは致命的な落ち度であり、戦争の帰すうを決定した。また戦争を起こすにあたって敵の数を最小にしなければならないのに、チリとの問題を残したままだった。そのためいざというときに戦力の集中を図れなかった。

(2) 戦術的特徴

航空優勢の確保

次に戦術的特徴から 5 項目について検討する。

³⁴ Cordesman and Wagner, "The Falklands War," pp. 260-263.

³⁵ Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas,'* pp. 52-56.

³⁶ Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas,'* p. 56.

第1に航空優勢の確保について、敵が守っている島嶼へ奪回上陸作戦を行うには、奪回する側に航空優勢が必要なことは説明するまでもないことだろう。もしアルゼンチン軍がフォークランド諸島の航空優勢をしっかりと固めていたならば、イギリス軍はフォークランドへ上陸できなかつただろう。しかしイギリス軍が完璧な航空優勢を保っていたかという点、決してそうではなく、アルゼンチン空軍及び海軍航空隊の攻撃を完全に封殺することができず、艦船に結構な損害を被ったのだった。

イギリスはシーハリヤーを航空優勢確保のための第1の手段とした。前述のようにシーハリヤーの機動性とその搭載空対空ミサイル AIM-9L 信頼性はミラージュ III とその搭載空対空ミサイル・マトラなどのそれを上回っていた。さらにイギリスのパイロットの練度はアルゼンチンのパイロットを上回っていた³⁷。1982年5月1日フォークランド上空におけるアルゼンチン空軍とイギリス海軍航空隊との最初の戦闘で、両軍ともシーハリヤーの優秀性を認識した³⁸。

しかし5月4日アルゼンチン海軍航空隊のシュペル・エタンダールがエグゾセ空対艦ミサイルでイギリスの駆逐艦「シェフィールド」(HMS *Sheffield*) を撃破すると、イギリス航空母艦群 (Combined Task Group 317.8 (the Carrier Task Group)) 指揮官ウドワード少将 (Rear Admiral John Woodward) は、航空母艦2隻をシュペル・エタンダールが到達し得ないフォークランド諸島のはるか東方に配置し、エグゾセの脅威を回避した³⁹。

これは、イギリスにとって航空優勢を確保する第一の手段がシーハリヤーであり、シーハリヤーが離着艦し整備補給を受けるのは、「ハーミーズ」(HMS *Hermes*)、「インヴィンシブル」(HMS *Invincible*) の2隻の航空母艦だった。「シェフィールド」損失後エグゾセに対する電子妨害技法は確立したが、ウドワードは航空優勢を確保するため、航空母艦を失う少しの危険をも避けたのだろう⁴⁰。

反面航続距離の短いシーハリヤーは、はるか東方からフォークランド上空を常に空中警戒するわけにはいかず、航空優勢の常時確保はできなかった。その結果多くのイギリス艦船がアルゼンチン航空部隊の攻撃を受け損害を被った。イギリスが早期警戒機を持っていた

³⁷ Ethell and Price, *Air War South Atlantic*, p. 64.

³⁸ Burden et al., *Falklands: the Air War*, pp. 145-146; なおこの戦闘はアルゼンチン空軍にとっても史上初の戦闘であった。

³⁹ Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 469; Hobson, *Falklands Air War*, p. 57.

⁴⁰ イギリスは「シェフィールド」撃破の後、エグゾセ空対艦ミサイルに対する電子妨害技法を確立し、この戦争中に使用している。5月25日のコンテナ船「アトランティック・コンヴェアー」(*Atlantic Conveyor*) のエグゾセによる撃破は、イギリス艦隊の電子妨害によりエグゾセがチャフの雲の方に導出され、その先に「アトランティック・コンヴェアー」がいたため命中した。民間徴用船の「アトランティック・コンヴェアー」には、電子戦支援装置および電子妨害装置が装備されていなかった (Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, pp. 145, 169, 228.)。

なら、空母部隊をもっとフォークランドへ近づけることができただろう。しかし前述のように 1970 年代後半に早期警戒機ガネット (Gannet) を運用できた通常型空母は退役し、「ハーミーズ」、「インヴィンシブル」ではガネットを運用できなかった⁴¹。

シーハリヤー不在時のフォークランドにおける盾となったのが、艦載のシーダート (Sea dart)、シーウルフ (Sea wolf) 等の艦対空ミサイル、地上のレピアー (Rapier)、ブローパイプ (Blowpipe) 等の地対空ミサイルならびに対空機関砲だった。これら艦上・地上配備の兵器はいわばイギリスの航空優勢を確保するための第 2 の手段とも言えるだろう。しかしこれらのシステムも欠点が存在した。特に艦載の防空システムとして全体を見た場合、センサーと火器管制装置の統合、電子支援装置とチャフ等妨害装置の統合および長射程防空システムと短射程防空システムの統合が進んでいなかった。シーダートは照射レーダーの特性から、遠距離では 2,000 フィート以下、近距離では 50 フィート以下の目標に対応できなかった。シーウルフは同時に 2 個以上の目標に対処することはできなかった⁴²。

5月1日以後アルゼンチン空軍および海軍航空隊は、直接シーハリヤーと戦闘することを避けようとした。その目となったのは、イギリス同様早期警戒機がないため、フォークランドの首都スタンレーに設置された AN/TPS-43 レーダーであった。しかし当然ながら、低空の探知距離は海面上で 26 nm (ノーティカル・マイル=海里)、高度 500 メートルで 35 nm に限られた⁴³。フォークランド諸島は合計すると新潟県に匹敵する面積 (約 12,000 平方キロメートル) を持ち、また最高標高も 705 メートルに達する。スタンレーは、フォークランド諸島のほぼ最西端に位置し港町であるので標高も低く、レーダーの死角になる範囲は広範な領域になったと思われる。そのためアルゼンチンの航空警戒管制も完璧に行うことはできなかっただろう。

アルゼンチン航空部隊は、5月21日のイギリスのサンカルロス上陸以後、対艦攻撃でイギリス艦船に相当な損害を与えたが、目標の優先順位を間違えていたと評価されている。というのもイギリスの軍艦が多数の損害を被ったが、それよりも地上にレピアー地対空ミサイルが配備される前に、貨物を降ろしている輸送船やサンカルロスに野積みになっている軍需物資を攻撃した方が、今後の地上戦を考えると有利だということである⁴⁴。しかしアルゼンチンの戦闘機/攻撃機は、アルゼンチン本土からフォークランド諸島までの距離が航続性能の限界であり、空中給油可能な機種は、A-4 とシュペル・エタンダールのみで、ミラージュ III とダガーはその装備がなかった。また空中給油機も KC-130 が 2 機しかなく、大部隊

⁴¹ Burden et al., *Falklands: the Air War*, p. 243.

⁴² Cordesman and Wagner, "The Falklands War," pp. 345-347.

⁴³ *ibid.*, p. 279.

⁴⁴ Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas,'* pp. 164-165.

に空中給油してイギリスの防空システムを飽和させることは無理だった。だからアルゼンチンのパイロットは目に入る最初の目標を攻撃し、またイギリスも、アルゼンチン本土に近い側に対空ミサイルを搭載した軍艦を配置した⁴⁵。

アルゼンチン航空部隊も相当な損害を被った。全期間にわたるアルゼンチン航空部隊の飛行中の戦闘による損失は、合計45機であった。これを原因別にみると、シーハリアーとの戦闘によるものが25機（AIM-9L：18機、30mm砲：5機、30mm砲およびAIM-9L：1機、回避中に海面衝突：1機）、対空ミサイル・対空砲によるものが20機（シーダート艦対空ミサイル：5機、シーウルフ艦対空ミサイル：3機、シーキャット（Sea cat）艦対空ミサイル：1機、レピアー地対空ミサイル：1機、40mm砲：1機、ブローパイプ地対空ミサイル・スティンガー地対空ミサイル・対空砲火の複合：5機、各種兵器の複合：4機）であった⁴⁶。アルゼンチン航空部隊の頑張りも5月25日までで、26日以後は戦場上空に到達するアルゼンチン攻撃機の機数が1日10ソーティ以下へ低下した⁴⁷。

結局、シーハリアーと交戦を避けるという消極的な戦法では、航空優勢を獲得できないし、イギリスの上陸作戦を阻止することもできないことが示された。航空優勢の源泉であるシーハリアー、対空ミサイル、それらを管制するレーダーおよびシーハリアーの根拠地である航空母艦を攻撃する積極策が求められるのだが、それを実現するには、アルゼンチン航空部隊に欠けているものが多すぎた。

海上優勢の確保について

第2に挙げるものは、海上優勢の確保である。一般に航空優勢が海域に及んでいれば海上優勢も確保されるものだが、この戦争では航空優勢が及ぶ前に海上優勢が発揮された。アルゼンチンのフォークランド占領から10日後の1982年4月12日に、イギリスはフォークランド諸島周辺200nmを海上封鎖した。これはイギリスの航空戦力がフォークランド諸島周辺へ到着する前に、攻撃型原子力潜水艦「スパルタン」（HMS *Spartan*）が到着し哨戒を始めたからだ⁴⁸。「スパルタン」は、アルゼンチンがフォークランド諸島へ上陸する1日前の4月1日にジブラルタル（Gibraltar）を出発していた⁴⁹。イギリス海軍の優れた即応性と原子力潜水艦の高い機動性を現しているものだろう。

⁴⁵ Horacio Mir Gonzalez, "An Argentinean Airman in the South Atlantic," Stephen Badsey, Rob Havers, and Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years on*, pp. 77-78.

⁴⁶ Ethell and Price, *Air War South Atlantic*, p. 245.

⁴⁷ Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, pp. 488-490.

⁴⁸ *ibid.*, p. 80.

⁴⁹ Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume I*, p. 200.

前述の通りアルゼンチン海軍は対潜水艦戦に対して何の準備もできておらず、アルゼンチン本土とフォークランド諸島の海上交通は事実上断たれてしまった⁵⁰。このためたとえアルゼンチン軍が多数の装軌車両やヘリコプター、あるいはジェット戦闘機部隊をフォークランド諸島へ展開できたとしても、海上交通が断たれては燃料や部品等の補給ができず、有効な作戦が行えたかは疑問である。またこの海上封鎖のため、アルゼンチンは土木工作機械をフォークランド諸島へ大量に輸送することもできず、島の要塞化にも失敗した⁵¹。

他方、アルゼンチンのディーゼル潜水艦もイギリス任務部隊の運用に大きな影響を与えた。この戦争当時アルゼンチン海軍は4隻のディーゼル潜水艦を保有していた。そのうち1隻の「サンタ・フェ」はイギリスが4月25日サウス・ジョージア島を奪回した際に捕獲された⁵²。イギリス任務部隊に対して哨戒行動ができたのは、残りの3隻のうちの1隻「サン・ルイス」にすぎない。しかも前述のとおり火器管制装置が故障していたため、戦争の間に何一つ戦果を挙げるができなかった⁵³。

しかしイギリス海軍は、この不完全な「サン・ルイス」1隻に対する対潜水艦戦のために、大変な労力を割き大量の対潜兵器を射耗した⁵⁴。対潜ヘリコプター2コ飛行中隊は4月から6月の間に合計2,253ソーティ、6,847時間の対潜哨戒飛行を行った。任務部隊の上空に昼夜を問わず常に3機が飛行し哨戒を行った。ある機体はひと月に265時間飛行したが、これは月の三分の一の時間に相当した⁵⁵。しかしそれでも「サン・ルイス」を沈めることはできなかった。ディーゼル潜水艦が、存在だけで脅威になることを示す一例だろう。

その後4月30日にイギリス任務部隊がフォークランド諸島周辺へ到着し、海上封鎖から航空機の往来も禁ずる全面封鎖へ強化した。5月2日にアルゼンチン巡洋艦「ベルグラノ」がイギリス攻撃型原子力潜水艦「コンカラー」に撃沈され、以後アルゼンチン海軍艦艇は、アルゼンチン本土領海内に閉じこもり、ここにイギリスの海上優勢が確立した⁵⁶。

地上戦での火力の集中と機動力の発揮

第3に地上戦での火力の集中と機動力の発揮を挙げる。アルゼンチン陸軍はアルゼンチン本土に多数の戦車を保持していたが、戦闘車両としてフォークランドに送り込まれたのは

⁵⁰ Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas,'* pp. 67-68.

⁵¹ *ibid.*, p. 61.

⁵² Scheina, *Latin America*, p. 247.

⁵³ *ibid.*, p. 262.

⁵⁴ Friedman, "The Falklands War," p. 914.

⁵⁵ Hobson, *Falklands Air War*, pp. 157-158.

⁵⁶ Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, pp. 296-298, 301.

10台程度の90mm砲装備のフランス製パナール(Panhard)装甲車(AML 90)のみだった。その使用状況については戦闘の最終局面であるスタンレー防衛に火力支援として使われたと言われている。イギリス軍は、8両の軽戦車をフォークランド諸島へ持ち込み、この戦争の最後の戦いの一つである6月13日ワイアレス・リッジ(Wireless Ridge)の攻撃に参加させた⁵⁷。

しかし全般を通じて見ると、両軍とも歩兵が主力となり、それを火砲が支援する戦いだった。もとよりアルゼンチン軍が機動戦に重きを置かないのは、攻勢的機動戦闘に関心がないためと言われている⁵⁸。しかしそう考えたとしても、実際に装軌車両をフォークランド諸島へ持ち込んで、泥炭地や岩稜地帯でどの程度のところまで機動できるのか確認することは絶対必要だった。

新潟県くらいの面積の島に1万2千人の兵力だから、アルゼンチンはあらゆる場所に兵を配置することはできなかった。アルゼンチン軍は、各拠点を固定的に防御し、フォークランド諸島の首都スタンレーへ7割の人員を配置し、残りの3割はグース・グリーン(Goose Green)並びに西フォークランド島のポート・ハワード(Port Howard)とフォックス・ベイ・ヴィレッジ(Fox Bay Village)の3か所に配備した⁵⁹。

5月21日サンカルロス(San Carlos)に上陸したイギリス軍の橋頭堡に対し、マルビナス諸島の最高司令官メネンデス少将(General de Brigada Mario Benjamín Menéndez)は、陸上兵力を機動して攻撃をかける方法を検討した。しかし輸送手段の点から徒歩行軍するしかなく、徒歩行軍間にイギリス航空部隊から攻撃を受けると防空手段がないということであきらめた⁶⁰。アルゼンチン陸軍は大体において受け身であり、主動を自ら握ることがなかった。

5月28日のグース・グリーン(Goose Green)の戦闘においても一時イギリスの攻撃がアルゼンチンの防御砲火のため頓挫しかけたことがあった。ここにアルゼンチン軍が兵力を集中して反攻したならイギリスはグース・グリーン占領をあきらめることになったかもしれない。しかしアルゼンチン軍は固定的な防御に徹し、機会を逃してしまった⁶¹。

一方機動については、イギリス軍も同じ問題を抱えていた。5月25日アルゼンチン海軍

⁵⁷ *Military Balance 1981-1982* (autumn 1981), p. 92; Cordesman and Wagner, "The Falklands War," pp. 287-288; Andrew R. Jones, "British Armour in the Falklands," *Armor* (vol. 92, no. 2, March-April 1983), pp. 26-30.

⁵⁸ Cordesman and Wagner, "The Falklands War," pp. 282-283, 288.

⁵⁹ Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas,'* pp. 58-59, 61-62.

⁶⁰ Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War,* pp. 363-364.

⁶¹ Mark Adkin, *Goose Green: A Battle Is Fought to Be Won* (London: Cassell, 2003, first published by Leo Cooper, 1992), pp. 140-141.

航空隊のシュベル・エタンダールから発射されたエグゾセ空対艦ミサイルが民間徴用貨物船である「アトランティック・コンヴェアー」へ命中し大火災が発生した。これによりこの船に搭載されていたチヌーク (Chinook) ・ヘリコプター 3 機とウェセックス (Wessex) ・ヘリコプター 6 機を失い、サンカルロスに上陸した全地上部隊をヘリコプターで移動するという当初の計画が大きく狂うことになった⁶²。

しかしイギリス軍はこれであきらめることはせず、2 コ大隊に各人 50 キログラムの装備を背負わせ約 80 キロメートルに及ぶ泥炭地や岩稜地帯を自分の足で前進させた。しかもこれはアルゼンチンと同様に航空優勢が完全には保障されていない条件下で行ったものである。結局似たような条件にありながら機動力を発揮したのはイギリス軍だった⁶³。ヘリコプターこのように地上部隊のニーズに全て応えられたわけではなかった。しかしそれでもイギリス軍のヘリコプターが地上部隊の機動、火砲・ミサイル等の移動、物資・弾薬の補給ならびに負傷者の救出等に果たした役割は極めて大きなものであった⁶⁴。

火力の集中でもイギリスが優っていた。イギリス軍の火砲の主力は、105mm 軽砲 (L118 light gun) だった。イギリス軍はこの砲と弾薬の移動にはヘリコプターによる支援が行われ、戦闘状況に合わせて火砲を移動し攻撃的に火力支援を行った⁶⁵。歩兵の支援には 81mm 迫撃砲やミラン対戦車ミサイルも使われた。拠点破壊等には歩兵の携行する 66mm LAW 対戦車ロケット弾 (M72 Light Anti-Tank Weapon)、84mm カール・グスタフ無反動砲 (Carl Gustav recoilless rifle)、40mm グレネード・ランチャー (M79 grenade launcher) も使われた⁶⁶。またイギリス軍は海軍の艦砲射撃も地上作戦支援に積極的に使用し、アルゼンチン海軍が「ベルグラノ」撃沈以後本国領海に引きこもってしまい陸上部隊へ何も支援しなかったことと好対照をなした。特に注目に値するのは、艦砲射撃の弾着を観測修正するための特別の教育訓練を受けた艦砲観測士官 (Naval Gunfire Observers: NGFO) が、陸軍及び海兵隊の部隊に配置されていたことである⁶⁷。

アルゼンチン軍はこの戦争で最大口径の火砲である 155mm 砲 4 門をフォークランド諸島へ持ちこんだ。ただし 4 門目が空輸されたのは敗戦前夜の 6 月 13 日だった。主力となった火砲は 105mm パック・ハウザー (Model 56 Pack Howitzer) で、数の面ではイギリスの

⁶² Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign* Volume II, pp. 559-560.

⁶³ *ibid.*, pp. 584-589.

⁶⁴ Cordesman and Wagner, "The Falklands War," pp. 325-327.

⁶⁵ *ibid.*, pp. 289-290.

⁶⁶ Adkin, *Goose Green*, p. 33.

⁶⁷ *ibid.*, p. 76; Cordesman and Wagner, "The Falklands War," pp. 289-290.

105mm 軽砲とはほぼ同数だったが、射程の面ではイギリスの 105mm 軽砲に劣った。81mm 迫撃砲や 106mm 無反動砲 (106mm recoilless gun)、また 20mm や 35mm の対空機関砲 (anti-aircraft machine cannon) をも地上戦闘に投入し、それなりの効果も上げた。火砲力の総計としてアルゼンチン軍はイギリス軍を上回ったが、アルゼンチン軍は火力を結集し集中射撃することをせず、攻撃的に目標を射撃しなければいけない時に消極的になるなど、火砲の運用面で失敗した⁶⁸。

情報・監視・偵察の優越

第 4 に情報・監視・偵察の優越を挙げる。イギリスは、アルゼンチンの侵略を事前に防げなかったことから明らかなように、南大西洋方面に対する情報収集の体制ができていなかった。この戦争が始まったときイギリスのアルゼンチン軍に関する情報はジェーン年鑑とミリタリー・バランス程度のものであった。開戦後は合衆国から、アルゼンチン軍の能力に関する素晴らしい情報の提供を受けた。フランスからもアルゼンチンへ輸出した兵器の性能や限界、特にエグゾセ・ミサイルに関する詳細な技術情報を得た。さらにフランスは、実際にミラージュ III とシュペル・エタンダールを提供し、ハリアーを操縦するイギリス軍パイロットにモック・コンバットまで体験させた⁶⁹。

アルゼンチンと国境問題を抱えるチリに対して、イギリスはホーカー・ハンター (Hawker Hunter) 戦闘機やキャンベラ (Canberra) 爆撃機などを供与した。その代わりに、チリ・アルゼンチン国境にレーダー・サイトを設け、チリがそれを運用する形で、アルゼンチン航空機の動静を入手した。またチリは、太平洋上のチリ領である孤島サン・フェリックス (San Felix) 島の飛行場からニムロッド哨戒機が隠密に偵察行動をすることをイギリスに許可した⁷⁰。

イギリスはニムロッド MR2 哨戒機を、アセンション島を基地にして、フォークランド諸島からアルゼンチン本土海岸線まで海面監視に使用した。ニムロッド MR2 は、ESM (Electronic Support Measures) 装置を搭載しており、また他に電子偵察用のニムロッド R1 もこの戦争に参加しており、SIGINT (Signal Intelligence), COMINT (Communication Intelligence) が行われたことは確実だろう⁷¹。

⁶⁸ Cordesman and Wagner, "The Falklands War," pp. 289-290.

⁶⁹ Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign* Volume II, pp. 72-73. Cordesman は、合衆国が衛星写真も提供したとしているが、Freedman は、本注引用部分で、サウス・ジョージア島以外の衛星写真提供はなかった、としている (Cordesman and Wagner, "The Falklands War," pp. 274-275.)。

⁷⁰ Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign* Volume II, pp. 394-403.

⁷¹ Cordesman and Wagner, "The Falklands War," pp. 277-278; Burden et al., *Falklands: the Air War*, pp. 401-404.

またイギリスは5月1日から SAS (Special Air Service) および SBS (Special Boat Squadron) の特殊作戦部隊をフォークランド諸島へ潜入させ、地上から上陸候補地点の情報収集、アルゼンチン軍の配備状況、制高点の偵察などを行わせた⁷²。上陸してからのイギリス地上軍も警戒監視を厳重に行っていた⁷³。

アルゼンチンには、イギリスにとってのアメリカのような情報を提供してくれる国は存在しなかった。アルゼンチン空軍は監視・偵察にボーイング 707 (Boeing 707) 旅客機、C-130 輸送機および航空写真撮影用のゲイツ・リアジェット (Gates Learjet) を使用した。1982年4月21日はボーイング 707 がアセンション (Ascension) 島から南下してくるイギリス空母戦闘群を発見することができた。リアジェットを除き偵察用に特別な改造を行ったものではなく、そもそも旅客機・輸送機だから、これらの機体の戦闘地域での運用は限られたものだった。現実にはフォークランド諸島周辺で偵察任務についた C-130 とリアジェット各1機がイギリスの迎撃により失われた⁷⁴。

アルゼンチン海軍航空隊は哨戒機ロッキード・ネプチューン (Lockheed Neptune) を2機保有していた。このうち1機は5月4日イギリス空母戦闘群をフォークランド諸島南方に発見し、その位置を通報した。それがシュペル・エタンダールを空母戦闘群へ向かわせ、エグゾセ空対艦ミサイルによりイギリス駆逐艦「シェフィールド」の撃破につながった。しかしアルゼンチン海軍のネプチューンは、機体とエンジン並びにレーダーと電子機器がいずれも古くて限界がきていた。2機とも5月15日には実任務から外され、その後を継ぐ機体はこの戦争間には現れなかった⁷⁵。

アルゼンチン軍の陸上戦闘においては積極的な警戒監視の不足がみられた。グース・グリーン島の戦い、あるいはスタンレー周辺の戦いでは、イギリス軍の夜間攻撃に対して、警戒の度合いが低かった⁷⁶。

このようにアルゼンチンの情報・監視・偵察が弱かったことは、イギリス任務部隊をサンカルロス上陸前に攻撃できなかったこと、サンカルロスの泊地において輸送船ではなく駆逐艦を攻撃したこと、陸戦で攻勢を受けているところに迅速な増援ができなかったことなど、多くの戦闘で負の結果として現れた。

⁷² Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign* Volume II, pp. 278, 287.

⁷³ Adkin, *Goose Green*, p. 119.

⁷⁴ Burden et al., *Falklands: the Air War*, pp. 76-89.

⁷⁵ Rivas, *Wings of the Malvinas*, pp. 243-244, 266; Burden et al., *Falklands: the Air War*, pp. 47-48; Hobson, *Falklands Air War*, pp. 165-166.

⁷⁶ Spencer Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches...: The History and Mythology of the Battle of Goose Green* (Cambridge: Lutterworth, 1995), p. 34; Ministry of Defence, *The Falklands Campaign: The Lessons*, Cmnd 8758 (London: HMSO, 1982), Para. 212, p. 17.

統合作戦の重要性

第5に統合作戦の重要性を挙げる。イギリスに常設統合参謀本部 (Permanent Joint Head Quarters: PJHQ) が設置されたのは1996年であり、1982年にはまだ存在しなかった⁷⁷。しかしイギリスの歴史から戦争といえ、船に乗り海外へ行って戦うのが常態であり、統合作戦の素地はあったと言える。フォークランド戦争は、フィールドハウス海軍大将 (Admiral Sir John Fieldhouse) を任務部隊司令官 (Commander Task Force: CTF 317/CTF 324) として、陸・海・空・海兵隊の部隊をその指揮下に入れた。この戦争における陸海空の統合作戦は、ほぼ成功であったといつてよいだろう。

一時危なかったのは、グース・グリーン攻撃開始前後にフィールドハウス大将と上陸作戦群 (Landing Group) 指揮官トンプソン海兵隊准将 (Brigadier Julian H. A. Thompson) との間に考えの相違が生じた時期であった。これはフォークランドにいて現場の事情しかわからないトンプソンと、ロンドンにいてイギリス国民の心情と政治家の考えを知るフィールドハウスの違いであった⁷⁸。

他方アルゼンチンにおいては、国防大臣または統合参謀本部が強力な権限を持っておらず、陸海空各軍司令官が自分の軍種の事項に専念して業務を処理していた。したがって統合作戦の計画は最低限のものしかなかった⁷⁹。したがって統合作戦は、海軍機へ空軍の空中給油機が給油するとか、陸軍の物資を海軍の船舶で輸送するような低位なレベルでは行われたが、三軍統合して国家目標を達成するようなレベルではなかった。

フォークランド戦争で一例を挙げれば、この「マルビナス」奪回は海軍の主導で行われ、奪回作戦の主力となったのも海軍と海兵隊であった⁸⁰。前述のように5月2日に巡洋艦「ベルグラノー」が、イギリス原子力潜水艦に沈められると、アルゼンチン海軍はほとんどの艦艇をアルゼンチン本土港湾に引きこもった。以後海軍で戦争に関与したのは、海軍航空隊の攻撃機および輸送機、海兵隊、フォークランド周辺で輸送等に従事した貨物船等で、いずれも少数にすぎなかった⁸¹。

これはアルゼンチン海軍が、第一にイギリスの対応と能力を完全に見誤っていたことであり、国家の命運をかける戦争の決意があまりにも軽率で無思慮であったことだろう。第二に対潜水艦戦という海軍のお家芸であるべきはずの作戦をほとんど試みないで蟄居するこ

⁷⁷ Jonathan Bailey and Davis Benest, "The Development of the Joint Doctrine since the Falklands Conflict," Stephen Badsey, Rob Havers, and Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years on*, p. 284.

⁷⁸ Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign* Volume II, pp. 552-564.

⁷⁹ Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, p. 103.

⁸⁰ Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas,'* pp. 1-6, 14-16.

⁸¹ Scheina, *Latin America*, pp. 255-289.

とは、アルゼンチン海軍は多年にわたり海軍として当然やるべきことをやっていたことを示すものである。

この戦争で戦力を消耗した場合、チリが攻撃してくるかもしれないという⁸²理由は、自己の保身であり、自己の怠慢を隠し責任を放棄するものである。アルゼンチン陸軍や空軍にしてみれば、屋根に上らされて、はしごを外されるようなものであったろう。アルゼンチン海軍は、国を負ける戦争へ追いやり、国民に不必要な戦死・戦傷者を強い、しかも自分は早々と舞台から引き揚げたのだった。このような態度では、陸海軍は統合作戦を行うことを選択しないだろう。

2 わが国のインプリケーション

まずわが国の島嶼の概要はどのようなものか概観する。日本は 6,852 の島からなりたち、その陸地総面積は 378,000 平方キロメートルで世界の第 62 位である。ここから日本の法律で本土と定義されている、四大島である本州、北海道、九州および四国ならびに沖縄本島の面積を除くと、6,847 島の合計面積は約 16,000 平方キロメートルで、これは日本の総面積の 4.2% にすぎない⁸³。各島嶼の面積で一番大きいものは択捉島の約 3,182 平方キロメートルから、小さいものでは沖ノ鳥島の約 7 平方メートルまでさまざまである⁸⁴。

イギリスとフォークランド諸島との距離には到底及ばないが、その広がりには結構大きく、最北端の択捉島と最西端の与那国島の間は 3,294 キロメートル、また択捉島と最南端の沖ノ鳥島の間は 3,020 キロメートルに達する。日本の領海と排他的経済水域を合わせた面積は約 447 万平方キロメートルに達し、世界第 6 位の広さを誇る⁸⁵。そして多数の島嶼がこの水域確保に大きく貢献していることは言うまでもない。

つぎに今まで述べたフォークランド戦争の特徴から日本のインプリケーションについて考察する。

まず戦略的背景から第 1 に、イギリス・アルゼンチン共に予想していなかった戦争であり、両軍ともに戦争遂行上大きな問題を抱えた。ひるがえって日本は、将来の島嶼戦に対して

⁸² *ibid.*, p. 288.

⁸³ 財団法人日本離島センター編『離島振興ハンドブック』国立印刷局、2004 年、1 頁。森野軍事研究所「離島の防衛問題 (1) — 離島の現状、振興策の実態」『軍事研究』35 巻 6 号、2000 年 6 月、164 頁。「国の面積順リスト」『ウィキペディア』<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E3%81%AE%E9%9D%A2%E7%A9%8D%E9%A0%86%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88> (2013 年 8 月 18 日アクセス)。

⁸⁴ 国土地理院「島面積」(平成 24 年全国都道府県市区町村別面積調) <http://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/MENCHO/201210/shima.pdf> (2013 年 8 月 18 日アクセス)。山田吉彦『日本の国境』(新潮新書、2005 年) 61-62 頁。

⁸⁵ 山田『日本の国境』14-15 頁。

その戦いの様相を正確に予測し、装備・編制・訓練に関しそれに備えなければならないことが導かれる。しかしこれには大きな困難が伴う。第一に日本の排他的経済水域が広大なこと、また島嶼ごと条件が大きく異なることで、いろいろな条件に備えなければいけないからである。第2に日本は島嶼を防御するという立場だから、戦闘の初めに時間と場所と手段を選べないという制限が付きまとう。さまざまな条件に対応しなければいけないということで、防衛力に冗長性と多くの機能が必要になるだろう。

第2に強力な同盟国の確保である。イギリスと同様に日本は世界最大の軍事大国であるアメリカと良好な関係にあり、上陸作戦等の共同訓練も行い、この点は心配ないように思われる。しかし日本とアメリカが共同して戦うのか、この戦争のようにイギリスが戦い、アメリカが後方支援等の援助をするのか戦闘の様相は予想がつかない。島嶼問題は日本の主権にかかわることだから、戦闘で一番厳しいところを負担しなければ主権国の立場にかかわるだろう。そうすると敵前に上陸することや相手の防空能力を制圧することなどは自前でできなければいけないだろう。

また戦闘での弾薬等の消耗が、平時の見積もりを大きく超えることは戦争のたびに言われる。この戦争でもイギリスは予想以上に弾薬等を消費し、迫撃砲弾、サイドワインダー空対空ミサイル、ハーブーン空対艦ミサイル等の弾薬等をアメリカから供給された。いざという時のために装備品の共通化についても考慮する必要があるだろう。

次に戦術面のインプリケーションについて考察する。

第1に航空優勢の確保だが、まず優秀な戦闘機と優秀なミサイルそして優秀な操縦者の確保が必要となる。それを効果的に運用するためには、早期警戒機等が必要になることがこの戦争で示された。またこの戦争では陸上を基地とする航空機の限界を示した戦争でもあった。つまり陸上を基地とする航空機では戦力投射密度は、基地からの距離に反比例するということだ。また空中給油機は少数では実質的意味がないということも示された。

すなわち日本の広大な排他的経済水域を考えると、陸上を基地とする戦闘機では、常時航空優勢を確保できない水域が大きく広がっているのである。これに対処するには、水域によっては空中給油機を増加することで対処できる場所もあるだろう。極めて遠い水域では、艦艇をプラットフォームとして、そこから発着艦できる戦闘機も選択肢の一つとなるだろう。

戦術面の第2として海上優勢の確保を挙げた。これは島嶼部すなわち浅海面での高い対潜水艦戦能力を維持しなければならない。また前述のとおり、遠隔の排他的経済水域では、海上・海中のプラットフォームが戦力発揮の基盤となる。そのためには艦艇の高い戦闘能力が必要となる。

戦術面の第3は地上戦における火力と機動の集中である。まず火力集中に関しては、目

標となる島嶼にどれだけ迅速かつ大量に各種火力を集中できるかにかかっている。また島嶼作戦においては、航空優勢並びに海上優勢を握った側が、航空機による近接地上支援および艦砲による火力支援を行うことができ、それだけ有利に地上戦闘を進めることができる。

機動については、各島嶼の地理的特徴によって大いに違って来るだろう。しかしヘリコプターは天候に影響を受けやすい点を除けば、大部分の地理条件に適合するのではないか。機動力発揮を車両によるか、ヘリコプターによるか、舟艇等によるかは別として、それらのための整備施設・整備人員・交換部品と燃料の集積が、島嶼あるいはその近辺に配置した船舶に必要なことは言うまでもない。

戦術面の第 4 として情報・監視・偵察に関するインプリケーションである。イギリスはこれが不十分だったためにアルゼンチンによるフォークランドの占領を招いた。同様にアルゼンチンもイギリスがサンカルロスに上陸するまで、上陸地点が不明だった。日本はその轍を踏まないために、継続的な通信情報、信号情報などの諜報活動と、広い排他的経済水域に常に人工衛星、早期警戒管制機ならびに哨戒機などによる監視偵察とを必要としている。またイギリスは、開戦直前に氷海監視船「エンデュアランス」(Ice Patrol Ship HMS *Endurance*) による監視により、アルゼンチンの行動を知った。さらにイギリスの特殊部隊の潜入によるフォークランド偵察は上陸地点決定に大きな役割を果たした。多くのレベル、多くの手段による情報・監視・偵察が必要なのである。

戦術面の第 5 に統合作戦へのインプリケーションである。島嶼防衛は、陸海空三つの領域にまたがる連続的な作戦行動であり、統一された目的の下で相互に支援し、互いの意図を知り情報の共有を図らなければ達成できない。自衛隊は 2006 年から統合運用体制に移行した。しかしそれまでの長い間、陸海空それぞれの関心に基づいて各自衛隊を運営してきた。その習慣から抜け出るように教育と訓練が必要だろう。島嶼防衛のためには、統一した作戦計画を定め、三自衛隊それぞれ担当部隊を決め、指揮通信系を整え、お互いに顔を合わせての訓練を多数回繰り返す必要があるだろう。

おわりに

以上、フォークランドの戦いから、島嶼国である日本の立場から見た場合、編制・装備・訓練の面でインプリケーションが多数存在することが判明した。よく 30 年一世代といわれるが、フォークランド戦争終了から 30 年以上の時の経過を考える必要もあるだろう。フォークランド戦争に使用されなかった兵器システムなどを簡単に列挙してみよう。AWACS/AEW、イージス艦、無人機、GPS、ステルス機、ステルス艦、巡航ミサイル、ネットワーク

セントリック・ウォーフェアなどなどである。すでに日本が取り入れているものも多数あるが、この一世代の進歩を取り入れつつ、フォークランド戦争のインプリケーションを生かさなければならぬ。

またこの戦争で日本をイギリスになぞらえる人をときどき見かける。しかしここで注意しなければいけないのは、わずかの違いでアルゼンチンが勝利したかもしれないと主張する評者がいることである。コーデスマンとワグナーはアルゼンチンの技術、訓練、信管の問題が少しアルゼンチン側に有利になり、あと2、3隻イギリスの艦船が沈没していれば、イギリスは撤退したであろうとしている⁸⁶。ペドラージャは、アルゼンチンの欠陥を、目標を軍艦に集中したこと、不発爆弾、多数機編隊を組まなかったことの3つを挙げ、このうち不発爆弾だけでも改善されていたなら、イギリスは侵攻をあきらめたであろうとしている⁸⁷。これらの点についてはさらに検討する必要があるだろう。

⁸⁶ Cordesman and Wagner, "The Falklands War," p. 351.

⁸⁷ Pedraja, "The Argentine Air Force versus Britain in the Falkland Islands, 1982," pp. 255-256.

